

巻頭言

300号までのVEの歩みと今後について

公益社団法人日本バリュー・エンジニアリング協会 顧問
自由が丘産能短期大学 名誉教授

土屋 裕 CVS、FSAVE



今、私は、現代の生活に不可欠な道具あるいは武器を前にして、かなり困惑しています。それはスマホと称される携帯電話機のことです。

近頃、周りの方から、『あなたの携帯は高級機ではあるが所詮ガラケーだね、そろそろ現代的な機種に変えたらどうか』という提言もあって、そのようにしたわけです。ところが、ここからが問題。どう操作すればよいのか、従来のようなマニュアルはない。とにかく聞きまわって教えてもらうより他に手はなく、「オヤジ泣かせ」ということになってしまいました。

とは言え、この個人的な困惑と悩みの反面、現代の電子技術、コミュニケーション技術の認識を超えた発展を実感することができたのは大きな収穫になりました。現在、AI、IoT元年ということが強調されていますが、わが身をふり返り、VEの立場でこの情報技術の革新を見た場合、これからの時代にどう対応していったらよいのか、大きな課題になるのではないかと思ったのです。

少なくとも今後のVE活動には、この変革を取り込んでいかなければならないし、さらに変革を先導していく心構えが必要だということなのです。

VE協会では、もう既にこうした危機感をもって、想定される環境変化への対応研究を進めてきているようですが、今まだ具体的かつ効果的な対応策を描くまでには至っていません。300号を迎えたVE誌も次号より電子化されることになりましたが、今直面しつつある変化は、これまでの変化とは次元の異なる、人智の電子化でしょうから、さらなる英知の結集と発揮、抜群の創造力が必要になります。

VEの領域ではこれまでにいくつもの解決困難な問題に直面し対応してきました。その一つがVE活動の経営認知の問題です。VE活動の有効性と成果は歴史的に実証され疑問を挟む余地がない。

にもかかわらず、経営には容易にリスペクトされなかった。その理由は多様でしたが、VEには明確な思想と方法論が確立されていないというのが主因のようでした。

そこで、価値論と経済学、経営学、心理学の書き物を調べ、さらにVEの考え方と実践経験を織り込むことからVEの原則(VEの5原則)をまとめ提示しました。この当時、たまたま、松下電器産業(現・パナソニック)の資材本部長をされておられた乗松さんに紹介をいただき、松下幸之助相談役にお会いする機会を得ることができました。短い時間でしたが、この時に相談役から『どんなことをしているのですか?』と質問されました。

そこで、朝会、夕会で全社員が唱和されていた「松下精神」とVEの原則とのかかわりについて、簡単に回答を申し上げましたところ『それは良いことです、しっかりやってください』というお言葉を頂き、その激励と重みに感動するとともに、その後のVE5原則の普及について大きな原動力となりました。

なお、この原則の徹底には各原則に対応した各種のVEの方法論、技法が対応していなければなりません。そのための開発が積極的に行われてきました。そうした内容を網羅した「VEハンドブック」が2007年に出版されました。この出版には100名をこえる会員企業・学界の方々の協力と努力が結集されています。皆さんが開発された数々の有効な技法も収録されているに違いありません。

これらの記述内容からみてもわかるように、日本のVEはもはや米国の引き写しではないことも理解できますし、今後のVEの動向や期待についても示唆されています。それはVEの諸原則を企業文化として普遍化すること、言うならばバリューマネジメントの手始めだと考えるのです。